

ジュディット ゴーティエ「神功皇后」：翻訳と解説

市川裕史

イントロ

ゴーチエの会によるジュディット・ゴーチエ「神功皇后」Judith Gautier (1845-1917) «L'Impératrice Zin-Gou» (1904)の翻訳に市川がイントロと解説を付したものである。Gautierのカタカナ表記は、「ゴーチエの会」や先行研究の引用は別にして「ゴーチエ」とする。「ゴ」にアクセントを置いて「エ」が小文字になるらしい「ゴーチェ」という誤表記を見るとムカつくから。

ゴーチエの会は1998年5月、井村実名子先生の呼びかけで(1980年発足のネルヴァルの会から分離独立する形で)坂田幸子、市川裕史を加えた3人で発足した。最初はテオフィル・ゴーチエThéophile Gautier(フランスロマン派の作家、1811-1872)を研究対象にした。『ネルヴァル全集』筑摩書房1997～2003の編集をめぐるイザコザもあって、共同訳のありようが大きな課題になった。そしてゴーチエの会[翻訳・編纂]、七月堂[印刷]で次の2冊を発表した。

-『テオフィル・ゴーチエによるドラクロワ論-第I部-』2002年12月[翻訳(登場順):井村実名子、市川裕史、小山聡子、羽入田桃子、鈴木文彦、角奈緒子、坂田幸子、年譜:増澤曜子]

-『テオフィル・ゴーチエによるドラクロワ論-第II部-』2006年4月[翻訳(登場順):鈴木文彦、渡辺響子、金沢公子、井村実名子、角奈緒子、市川裕史、岡田史生、坂田幸子、羽入田桃子、小山聡子、年譜:増澤曜子]

鈴木くん、角さん、羽入田さん、岡田くん、お元気ですか?

1998～2006年は東京女子大学や井村先生宅で、2007～2017年は金沢先生宅でたいてい2ヶ月おきに会合を持った。2007年以降、金沢先生のおもな専門であるジュディット・ゴーチエ

ィエを対象をずらし、「神功皇后」や『篡奪者[徳川家康]』*L'Usurpateur* (1875) [第2版(1883)]以降のタイトルは『太陽神の巫女/あゝ斎宮さま』*La Sœur du Soleil* を読んだ。2018年に小平の市川研究室に場所を移した。井村先生から引き継いだけどオレは代表って柄じゃないので、いつまで続くだろうか? オプトマン(勝山)祐子さん、野添愛さん、どうかよろしく!

ジュディットはテオフィルの長女で、友人ヴィリエ・ド・リラダンAuguste de Villiers de L'Isle-Adam (1838-1889)、夫(その後離婚した)マンデスCatulle Mendès (1841-1909)と一緒にフランスにおけるヴァーグナー派を結成したり(ゴビノーArthur de Gobineau (1816-1882)とは親しくなかった)、中国人家庭教師と一緒に漢籍を読んだことや西園寺公望(1849-1940)や光明寺三郎(1848-1893)らフランス語を話す日本人と知り合ったことから広い意味のオリエントに関心を持ち中国、日本、インド、ペルシア、パレスティナなどを題材にした小説や演劇を書いたりした。オリエント神話に靈感を受けた詩人ルコント・ド・リールLeconte de Lisle (1818-1894)、世界各地の美女を口説いた海軍士官・小説家ロティPierre Loti (1850-1923)の友人でもあった。ロマン派的異境趣味から発展した、19世紀後半のオリエント学復興やプレ・グローバリゼーション表象の好例とされる。

オレにとってはむしろ19世紀後半フランスのポピュラー小説の好例である。デュマ&マケ『三銃士』(1844)をターニングポイントとして、その後、少なくとも1930頃、映画によって娯楽の王座を奪われるまで順調に発展したポピュラー小説。空間的・時間的異境趣味や(もちろん)恋愛が重要な構成要素だった。例えば、17世紀はじめの日本を舞台にする『篡奪者』では、スーパーヒーロー毛利勝永が、皇后に宮

廷風恋愛を捧げる一方で、年長の友人として豊臣秀頼を内憂（母親の浪費と不倫）外患（徳川家康による暗殺計画と軍事的侵略）から守ろうとする。真田幸村のトンネル作戦も描かれる。また、12 世紀後半パレスティナを舞台にする『暗殺教団の長』*Le Vieux de la Montagne* (1893) では、謎のイスラム美女ガジレー（実はエルサレム王アモーリ 1 世の庶子）がラシード・ウッドィーン・スィナーンとセザレ伯ユークに惚れられる。暗殺教団の長は皆殺しにもできたのだが、恋愛感情を乗り越えて超人となり、ガジレーとユークを結婚させて（悪逆非道テンブル騎士団および篡奪者サラフッディーンと対決するため）エルサレム王と同盟を結ぶ…

ジュディット・ゴーチエ「神功皇后」に関連するおもな参考文献を年代順に挙げると次のようになる。

- Joanna Richardson, *Judith Gautier: A Biography*, Quartet Books, 1986.

- 金沢公子「ジュディット・ゴーチエの『神功皇后』」in ふらんす手帖編集部 [編]『ふらんす手帖』1989, pp.58-65. [以下、金沢 1989 と略す。]

- 金沢公子「ジュディット・ゴーチエの『ジョン・グウ皇后』：神功皇后の新羅征伐物語のフランスにおける受容」in 成城大学法学部『教養論集（安田一郎教授退任記念号）』1990, pp.107-123.

- Bettina L. Knapp, *Judith Gautier, Writer, Orientalist, Musicologist, Femi-nist: A Literary Biography*, Hamilton Books, 2004.

- 小山ブリジット [著]、隠岐由紀子 [訳]「東洋を謳う比類ない女流作家ジュディット・ゴーチエ」『ジュディット・ゴーチエ日本・中国趣味著作集』別冊付録、エディション・シナプス、2007. [著作集はファクシミリであり、誤植そのまま編者の注釈はない。オレみたい Gallica にあっても紙で読みたい人間にとっては有用だが、日本・中国ネタしかないので作家像を偏らせる恐れがある。]

- Judith Gautier, *Œuvres complètes*, édition d'Yvan Daniel, Garnier Classiques, 2011～. [イヴァン・ダニエルによる編年体全集 6 巻が完結

すれば、ジュディット・ゴーチエ研究の基本文献になるはず。しかし、2018 年10月現在、1893 年の著作を含む第 2 巻までしか出ていない。校訂&注釈ちょっと甘い。多くの人（少なくとも数人）が自伝 3 部作の巻を楽しみにしているけど、作者が意図的に時間的指標を消したこともあって正確な注釈を付けにくいことが予想される。]

- 吉川順子『詩のジャポニスム：ジュディット・ゴーチエの自然と人間』京都大学出版会、2012. 吉川さん、お元気ですか？

ゴーチエの会が翻訳の底本としたのは、1904 年に出た『絹と金の屏風』(Judith Gautier, *Le Paravent de soie et d'or*, Charpentier & Fasquelle, 1904, pp.239-247)。金沢先生がお持ちだった青焼きコピー、および 2007 年に出た『ジュディット・ゴーチエ日本・中国趣味著作集』第 6 巻前半。イヴァン・ダニエルによる編年体全集にはまだ含まれていない。新聞雑誌の初出があるかどうかは不明であり、作者の著作に初めて収録されたのは 1898 年、『クー=ン=アトヌー（パピルスの断片）』(Judith Gautier, *Khou-n-Atonou (Fragments de papyrus)*, Armand Colin, 1898 [Hachette-Livre BNF, 2013], pp.183-204) において、「神功」*«Zin-Gou»* というタイトルだった。1898 年のテキストには 1904 年のテキストに含まれない約 30 行があるが、これについては後述。

『絹と金の屏風』は、[1]「血まみれ頭の王子」pp.1-28（『クー=ン=アトヌー（パピルスの断片）』1898 からの再録）、[2]「地獄下り」*«Une Descente aux enfers»*、[3]「魔法の上着」*«La Tunique merveilleuse»*（『イゾリーヌと蛇花』*Isoline et la fleur serpent*, 1882 からの再録）、[4]「白い鳩」*«Le Ramier Blanc»*（1880 年私上演、1899 年オデオン座上演）、[5]「豎琴を捨てるユ=ペ=ヤ」*Yu-Pé-Ya jetant sa lyre»*、[6]「揚子江の女船頭」*«La Batelière du Fleuve Bleu»*（『愛の残酷さ』*Les Cruautés de l'Ajour*, 1879 からの再録）、[7]「禁じられた果実」*«Le Fruit défendu»*（『イゾリーヌと蛇花』1882 からの再録）、[8]「福州の宝石商」*«Le Joaillier de Fou-Tcheou»*、[9]「神功皇后」（『クー=ン=アトヌ

一 (パピルスの断片)』1898 からの再録)、[10] 「天界から来た機織り女」《La Tisseuse Céleste》、[11] 「お姫様 16 歳の誕生日」《Les Seize ans de la Princesse》(『オリエントの花々』*Les Fleurs d'Orient*, 1893 からの再録) の 11 篇から成っている。[3] がなかば演劇、[4] がすっかり演劇、それ以外は短編小説。再録が多く所謂ベスト盤みたいだが、『オリエントの花々』には多かったイスラム圏ネタを諦めて) [1] のヴェトナムネタの後、[2] ~ [8] で中国ネタを連ね、最後の [9] ~ [11] を日本ネタにするという一貫性が認められる。主題は(すこし幻想性に入った)人情ものが多いが、その傍らで、女性君主がみずから軍隊を率いて戦う [1] と [9] が際立っている。[1] では徴姉妹が漢の侵略をいったん退けた後、馬援に負けて戦死する。[9] では神功皇后が朝鮮半島を侵略して勝ち誇る。侵略するか/されるか、勝つか/負けるかという違いはあるものの、統治し戦う女性という主題によって結びつけられる。ヴァーグナー派にとっては当然、《ニーベルンクの指輪》のブリュンヒルデと重なる。

『絹と金の屏風』には挿絵として、[1] に日本の合戦風景、[9] に天女を従えた吉祥天など、物語と多少関係ない中国や日本の絵画が 20 枚ほど精密再現されており、これが浮世絵好きをターゲットにしたセールスポイントだったのかも。

「神功皇后」の翻訳担当者は、アルファベット順で市川裕史、井村実名子、金沢公子、増澤曜子、野村麻梨、坂田幸子、設楽(小山)聡子。大勢で少しずつ訳した文章を取りまとめるのってちょー大変。その仕事を(翻訳担当が最大でもあった)野村麻里が担当し、ジュディット・ゴーチエ略年表と合わせて小冊子を出す計画だった。文学フリマいいよね。しかし、年表制作が頓挫した一方(デジタルネイティブ世代にアピールするにはウィキペディア項目を書く方が効果的かも、野添さんよろしく)、野村麻里が最終的に井村先生の見解を活かして見事に取りまとめてからヴェトナムに旅立った。一度もヨーロッパを出なかつたジュディットを真似せず、アルジェリアに滞在した後、今はヴェトナム

に住む野村さん、お元気ですか? ここに掲載するゴーチエの会訳は、(メールも USB も使わないことにしてる)オレが野村版のプリントアウトを見ながら書き写したもので、意図的に改変した数箇所も含めて、脱落や間違いがあればオレの責任である。

翻訳: ジュディット ゴーチエ「神功皇后」

夜。宮中はみな寝静まっている。不寝の番の衛兵。物音ひとつしない。

しかし、ひとりの男が暗闇に紛れて扉を越え中庭と庭園を抜け、あろうことか、すでに眠りについた皇后のの寝室に闖入した。

寝室は寺院のように香を焚きしめ、絹の笠の灯明が灯っていた。男は躊躇なく進んだ。足元で炭木の床がきしみ、皇后ははっとして目覚めたが、叫び声はあげなかった。

皇后は男を見て誰だか分かった。偉丈夫の將軍、建内宿禰 [たけうちのすくね] ② である。戦装束に身を固め、全身、拭いきれない血と埃で汚れていた。

皇后は紗の蚊帳をさっと払いのけ、建内に駆け寄り寄った。裾の長い淡い色の夜着をまとった皇后は美しく、すらりと背が高く、気品に満ちていた。

「あなたが戦場から離れ、ここに来るとは! どうした? 負けたのか?」

建内はひれ伏した。

「いいえ、もっと悪いことでございます」

「何が起きた?」

「神々の血をひかれる貴い夫君、天皇陛下がおかくれになりました。陛下は先頭に立って戦い兵士たちを勝利に導かれておられました。しかし新羅の矢が陛下を射貫き…天界に戻られたのでございます」

「ああ、悪い予感が!」と、皇后は叫んで、乱れ髪を掻きむしった。「私の聞いたお告げでは、日本國の主がみずから新羅へ攻め込んではならないとのことでした! …仲哀天皇は私の言葉を信じようとせず崩御された! 武勇すぐれた我が夫、日本武尊 [やまとたけるのみこと] の皇子、あの方がこの世を去った。父君の魂がシラ

トリの、巨大な翼の鷲に宿ったとき、父を慕うゆえに白い鳥を十萬羽も集められた！それほど優しい皇子の魂は何に宿っている？ああ、今どこに？」

しかし、皇后はすぐに落ち着きを取り戻し、建内に立ち上がるよう指示した。

「ではすべて終わり、敗戦だ」と言った。

「なにも終わっておりません、陛下」と、建内は跪いたまま答えた。「中絶しただけです。私みずから帝の亡骸を運んで天幕の下に寝かせ、負傷なさっただけで間もなく回復されるだろう、と言いました。そして口外すれば死罪だと告げて近衛兵に亡骸を託し、密かに出立し、道中何頭もの馬を乗りつぶして急ぎ参上いたしました」

凜々しい戦士が麗しい女王を見上げると、女王もうなじを傾けて戦士を見つめた。彼女は建内の熱い魂のうちに勇猛さ、知性、献身、そしておそらく恋慕を読み取った！気丈でもあり気弱でもある彼女は、このような心の持ち主に支えてもらえば、皆に恐れられる無敵の存在になれると思った。今まで感じたことのない不思議な感情がわき起こった。野心と勇気の感情だった。夫の魂が妻の魂に力を貸すために戻って来たかのように、いかなる危険にも立ち向かう覚悟ができた。今までは婀娜っぽく、おっとりして、ささいな前兆に怯えていたのに！

「ご苦労であった、将軍」と、皇后は建内に言った。「あなたは正しいことをした。帝は生きておられ、負傷されただけ。明日、帝のおられる本陣に向かおう。私が名代を務める⁽⁴⁾。我々は勝利に向けて進むだろう。建内よ、皇国の支えとなれ。内大臣の位を受けよう」

誉れ高い神功皇后は数日前から遠征の途上にあった。傍らには建内があり、増援となる新たな軍団が続いていた。

槍兵隊が先頭を進む。鉦[しころ]で首回りを守り三日月型の銅飾りを額に乗せた面貌付き兜を被り、鎧で身を固め、長槍を握り、左耳の後ろに小さな旗を差している。続くのは弓兵隊であり、額に白い鉢巻きを巻き、その両端を後方にたなびかせ、背中の臍に長い矢を幾本も差

して、漆塗りの強弓を手にして進む。別の弓兵隊が続く。この部隊の兵士は奇妙な形の弓を持っている。最近発明された弩というもので、石を発射することができるのだ。

その後ろを歩兵隊が進む。矛槍や両手剣や斧で武装し、真っ赤な剛毛の口髭と眉毛を付けた恐ろしげな黒い仮面で顔を隠して、銅製の触覚や鹿の角で飾られた兜を被っている。鎖帷子にすっぽりくるまって外からは目しか見えない者もいる。このように行軍する部隊の頭上に目をやると、あらゆる形状の軍旗や紋章が渾然一体となって揺れている。

皇后は、たてがみを鶏冠のように編み上げた駿馬に跨がり、細工彫りの大きな鐙に足を置いて先頭を進み、松浦川⁽⁵⁾という川の岸辺に着いた。

美しい皇后は小休止を命じた。女の気まぐれか、奇妙なことを思いついた。川で釣りをしてみたくなったのだ。

岸辺の小高い場所に立って釣り糸を投げ、大声で言った、

「遠征が成功するなら魚がかかり、失敗するならかからないであろう」

一同は静まりかえった。皆の眠差しが、水面を漂う小さな浮きに注がれた。すると浮きは震え踊りだした。皇后はすばやく糸を引きあげた。糸の先で鮎が小刀のように輝いた。

歓びの歓声が上がった。

皇后は叫んだ、「進め！船団が待っている。我々は必ず勝つ！」⁽⁶⁾

樞日浦⁽⁷⁾という錨泊地に着いた。船団は壮麗で威風堂々たるものだった。大型のジャンク船は怪物の群、帆はまるで怪物の翼のようだった！船乗りが皇軍を歓呼で迎え、長い雄叫びがそれに答えた。

皇后は馬を降り波打ち際に進んだ。黄金の冠を外して長い髪を解いた。香の匂いを消すため海水に浸した。絞ってから男の鬚のように一本に束ねた。

そして戦斧を手に取り、もっとも壮麗な船に乗り込んだ。

女戦士として甲板に立った皇后は皆の目に、台座に立つ彫像のように見えた。動物の角で

きた黒い板を真紅の絹糸でつないだ甲冑が膝下まで覆い、雲の模様を織った白い錦の袴が踝のあたりで絞られていた。肩当ては黒の天鷲絨で、幅広の豪華な袖が足元まで伸び、全体として外套のように見えた。袖の生地には金の花菱がちりばめられており、裏地は無地の縮子だった。

甲冑の胸に輝くのは金細工の菊だった。細長い円錐形の冠を絹の紐で留めて顎の下で結び、戦斧を大小 2 本の刀とともに帯に差して、女戦士は槍のような長さの象牙と黄金でできた指揮杖にもたれていた。

風を受けて帆が膨らみ、船団は波に揺れた。その時、神功皇后が、視線を宙に据えたまま声を上げた。

「見よ！ 海神だ！ 住吉明神おんみずから我々を導いて進んで行かれる！」

海神の姿が見えたのは皇后だけだったが、その言葉を疑う者はひとりもいなかった。

新羅王は宮殿の奥で震え涙を流した。国土は侵略され兵は敗走した。無敵の日本軍に対してはいかなる抵抗も無駄であり、新羅王自身が戦う前から負けを予感していた。

征服者が既に都を征服した。甲冑姿の皇后が宮殿に迫った。いにしえの英雄たちの魂が彼女を突き動かした。度重なる嵐や幾多の障害を乗り越えて、軍団をこれほどまでの勝利に導いたのは彼女だった。

彼女が先頭に立って突撃し、堀を越えて王宮の門に到達した。よく響く声でこう叫んだ。

「新羅王は日本の犬だ」

門の扉がこなごなに碎け、勝ち誇った皇后が瓦礫の上を進んだ。

皇后は象牙と黄金の槍を門に吊り下げさせた。それは幾世紀もの間そこに留まることになる。

殺戮と略奪の時が来た。兵士たちは戦で流した血の対価を手にするようになる。女君主の命令を待つばかりだった。

しかし、そこに頭を垂れ両手を背後で縛られた新羅王が現れた。彼の進む大広間には死傷者が折り重なっていた。捕虜として鎖につながれ、平伏し服従し降伏するためにやって来た。

「私はあなたの奴隷です！」と、新羅王は美しい女戦士の足元に身を投げて、嗚咽混じりに叫んだ。

その時、堅固な鎧の下で女性らしい心が目覚め同情を感じた。神功皇后は哀れな新羅王を立ち上げさせ、縛めを解いてやった。

「あなたは私の奴隷ではない」と、彼女は言った。「私の臣下として新羅王であり続けなさい」

彼女は略奪を禁止した。新羅王の財産だけは奪われることになる。中国で作られ日本ではまだ作れなかった、絵画や工芸品など繊細優美な物品をすべて自分のところに持って来るよう、彼女が命じたからである。

絶望の後に歓喜が続いた。人々は寛大な征服者を讃えた。皇后は勝利の報償を美男の將軍、建内の目の中に求めた。建内は一段と慕る賛美と恋慕ゆえに動揺を隠せなかった。

誉れ高い神功皇后が都に凱旋して皇子を産み、長く太平の世を治めたのは、今より遡ること 13 世紀以上前のことである⁹⁾。現代の日本は盛んに進歩を渴望し、ずいぶん昔と様変わりしたが、実のところ何も変わっていないのではなからうか？

兵士は輝く角で飾った黒い兜をもう被っていないし、当時としては「最近発明された」弩の代わりに最新鋭の大砲と銃を手に行っている。しかし、今でも命知らずの勇猛果敢な戦士たちである。

現在の天皇は「調停する人」という意味の睦仁という方で、政府の公式文書によると「天地開闢以来、未来永劫に」日本を治める神々の王朝に属しており、かの神功皇后の直系の子孫である¹⁰⁾。その即位によって始まった時代を「明るい治世」という意味の明治と呼ぶのだが、実際まばゆいばかりの輝かしさである。明治天皇は戦勝によってヨーロッパを驚かせたのであり、まちがいなく皇祖皇宗に比肩する。そして光り輝く皇祖、太陽の女神である天照大神は、子孫の子孫である今生帝にご自身の面影を認めて、天上界から微笑みかけているはずだ。

(1) 神功皇后の神話は『古事記』（倉野憲司・武田祐吉[校注]『古事記・祝詞』岩波書店, 1958, pp.228-233）や『日本書紀』（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋[校注]『日本書紀：上』岩波書店, 1967, pp.330-340）に見られる。仏訳はなかったしジュディットの日本語能力は『古事記』や『日本書紀』が読むには程遠かったので、西園寺公望や光明寺三郎らフランス語を話せる外交官や文人による耳学問にちがいない。

(2) 『古事記』の建内宿禰「大臣」は武官ではなく神官だが、ジュディットの「將軍」は皇后に宮廷風恋愛を捧げているように見える。『纂奪者』（1875）における毛利勝永の皇后への恋慕、『楽園の征服』*La Conquête du Paradis*（1887）におけるピュシー侯爵のウルヴァシ女王（バンガロールを首都とするヒンズー教国の君主）への恋慕…

(3) 『古事記』では「八尋白智鳥」（前掲書 p.223）だが、ヴァーグナー派にとって「白鳥」と言えばローエングリン。ジュディットにおいては日本武尊とローエングリンが結びついたにちがいない。

(4) 『絹と金の屏風』（1904）は、『クー=ン=アトヌー（バビルスの断片）』（1898）にあったこの後の約 10 行を削除している（Judith Gautier, *Khou-n-Atonou (fragments d'un papyrus)* [Éd. 1898], Hachette-Livre BNF, 2013, pp.191-192）。註⁽⁶⁾ (3) と合わせて、神功皇后が妊娠中であり出産を遅らせるために鎮懐石を使った（統率権は子宮の中の応神天皇に由来した）、という要素を意図的に消していることが分かる。削除箇所が続く「我々は」1898 年版では皇后と胎児、1904 年版では日本軍、あるいは、「建内よ」の段落換えが省略されて直接つながったことから深読みすると）皇后と建内であると解釈される。

[私が名代を務める。] 次代の帝である皇子が私に語りかける。皇子が母胎から軍隊を指揮し戦場に赴くだろう！皇子が戦闘中あまり揺さぶられないよう、私はただ緋色の帯を腹に巻こう。[我々は勝利に向けて進むだろう。／建内よ…]

(5) Matsoura-Gawa. 『古事記』では「筑紫の末羅縣の玉島の里」（前掲書 p.233）、『日本書紀』では「火前國の松浦縣に到りて、玉嶋里の小河の側に」（前掲書 p.332）であり、タマシマよりもマツラがジュディットの印象に残ったようだ。ジュディットのインフォーマントは、鮎釣りが遠征の占いになる『日本書紀』ヴァージョンを選んだにちがいない。「ジュディットのこの物語は、記紀に書かれている日本の神話をみごとに再生したものであ[り]『古事記』よりも『日本書紀』の方に、依存度が大きい」（金沢 1989, p.63）。

(6) 『絹と金の屏風』（1904）はここでも『クー=ン=アトヌー（バビルスの断片）』（1898）の約 10 行を削除している（*ob.cit.*, p.196）。鎮懐石のエピソード。『古事記』の「御腹を鎮めたまはむと爲て、石を取りて御裳の腰に纏かして」（前掲書 p.233）、『日本書紀』の「石を取りて腰にみて」（前掲書 p.336）。「皇后のおなかのなかの子の父親を仲哀天皇としないために、ジュディットはこのテーマを避けたのではないか、とも考えられる」（金沢 1989, p.62）。

しかし、立派な老人が進み出て跪いた。隠者であり大いに尊敬を集める賢者だった。彼は皇后に魔法の石を献上した。穴のあいた青っぽい丸石だった。

「この石を腰につけてください」と、彼は言った。「戦争終結まで出産を遅らせられるでしょう」

神功皇后は神官に感謝し、建内に手伝わせて石を腰に下げた。

(7) Kasifi-No-Oura. 『日本書紀』の「樞日浦」（前掲書 p.334）。続く男装のエピソードも『古事記』にはないので、ジュディットのインフォーマントは『日本書紀』ヴァージョンを選んだにちがいない。

(8) この文章は『絹と金の屏風』（1904）よりも『クー=ン=アトヌー（バビルスの断片）』（1898）において数行長い（*ob.cit.*, p. 203）。「16 世紀以上前」（1898）か「13 世紀以上前」（1904）か。神功皇后が摂政ないし女帝だったのが西

暦 3 世紀なら 1898 年版の方が近いが、1904 年版も必ずしも誤植ではなくて神功皇后と持統天皇を重ねてみたのかもしれない。

誉れ高い神功皇后が都に凱旋し、魔法の石のおかげで通常の出産予定日より大いに遅れて皇子を産み、長く太平の世を治めたのは、今より遡ること 16 世紀以上前のことである。

(9) 鎮懐石のエピソードを削除すると、皇后と将軍とのラブラブが強調されて、応神天皇の父親が建内であるかのように読める。「その子の父親は建内宿禰と読み取る方が自然なように思われる」(金沢 1989, p.62)。注(2)で触れたように、宮廷風恋愛がジュディットお気に入りのテーマだったから？ ぼっこり腹で戦斧を掲げ

る姿がブリュンヒルデっぽくないから？ 応神天皇の父親が仲哀天皇でも建内でも(神功皇后において男系が途絶えていたとしても)、「神功皇后の直系の子孫」にはちがいない。「天地開闢以来、未来永劫に」を明治 Me-Dgi 政府の見解として引用したのは、作者がそれを胡散臭く感じたからか？

ときどきフランス好きにならなければフランス語できるようにならないと思ひ込む日本人学生がいるけど、昔のフランス作家が日本ネタで作品を書きながら同時代の日本政府の立場と距離を取ったり、また今日、フランス文化を研究する日本人が同時代のフランス政府の立場と距離を取ったりするのは、当たり前のことではない。フランス好きだからってフランス語できないのを大目に見られるワケないじゃん。

(市川裕史・本学准教授)